

# 六條藤家の盛衰

—その歌壇的地位の考察—

井上宗雄

## 1 白河院近臣としての顯季

六條藤家は修理大夫顯季にはじまる。顯季は天喜三年の生れ（公卿補任・尊卑分脈。以下斷り書きのない叙任及び系譜についてはこの二書に依つた）、白河天皇より二歳年少である。公卿補任に依れば大納言閑院實季の猶子、實父は正四位下美濃守隆經と言う。隆經は左大臣魚名の流、異代四、五位の受領に止まつた家柄である。但し顯季が隆經の子であるということには異説があつて實の父は隆經の長子師隆であるが、師隆無官の故に祖父隆經の子となつたのだと尊卑分脈には注記してある。所が「吉部秘訓抄」には、顯季の實父は道長の子春宮大夫能信（治暦元年顯季十一歳の年に薨す）であると記されている。即ち顯季の母親が能信に寵愛され懷妊したので能信は親子を隆經に嫁せしめ、隆經はこれを寢殿南面に迎えて、そして生れたのが顯季であると言うのである。これは王朝貴族社會でしばしば見られる人間關係であるが「吉部秘訓抄」の史料的价值から考えても、或は顯季の父が隆經であり又師隆であるというように曖昧な點からしても、能信庶子

説が眞實であらうと思われる。ともかく顯季は表面受領の子と生れながら、そのみに止まらぬ運命を持つていたのである。

顯季の母は、魚名流の受領大舍人頭親國の女で、後に皇太弟尊仁親王の皇子貞仁親王の乳母となり、從二位親子と稱せられた人である。尊仁親王の御息所、即ち貞仁親王の母は、中納言閑院公成の娘茂子で、公成の妹が能信の室であつた關係に依つて茂子は能信の養女となつて御息所となつたのである。能信の縁によつて親子が乳母として參仕するようになったのか、或は茂子の許にいて能信と交渉を生じたのかその前後は明らかでない。

東宮尊仁親王は關白頼通と直接の血縁關係がない爲に頼通から頗る冷淡に扱われ、能信が兄に對抗して東宮をかばつたのは有名なことである（今鏡・愚管抄等）。しかしその東宮も治暦四年後冷泉天皇の崩御によつてようやく皇位を踐み得たが（後三條天皇）、天皇は已に公成も能信も故人で、外戚として權威を振ひ天皇を制肘する勢力のないままに、攝關家を抑えて皇室の權威を回復しようとし、村上源氏の師房、能信の子能長、小野宮流の經季・資中、大江匡房、日野實政、小槻孝信ら長く攝關政權の下に壓迫されて

來た傍系貴族や、受領層・儒家の中流下流貴族を登用し、例えば記録所の役人にはすべてこれらの貴族を充てると言つたように、敢然と諸政の改革に着手した。延久四年天皇は貞仁親王（白河天皇）に讓位して院政を開始しようとしたが、翌五年その實を擧げえぬうちに崩じ、ここに白河天皇の親政が開始される。天皇はこの時わずか二十一歳であつたが、先帝に擧げ用いられた貴族の外に、更に閑院實季（公成男）、源俊明、藤原通俊らを登用して先帝の政策を繼承し、親政の實を擧げようと努力した。後に天皇が院政を開始するやその側近に侍して權威を振つた「院近臣」と稱せられる人々は殆ど後三條・白河の在位時代に登用せられたこれら中流貴族、即ち有識家・儒者・受領又は乳母の關係者等を母胎としていたのであつた。（註一）

白河天皇には二人の乳母がいた。一人は日野實業女で、これは天皇が五歳の時に歿し、又天皇は實母の茂子を十歳の時に失つたので、他の一人の乳母である親子をただ一人の母性として慕い（今鏡すべらぎの上）、寛治七年十一月、親子の病いがあつくなるとその邸にしばしば行幸し、二十一日親子薨ずるや愁嘆殊に甚しかつたと言ふ（中右記）。その子である顯季は即ち天皇と乳兄弟の間柄であるが、天皇の顯季に對する親愛の情をまずこの點から察することが出来るであらう。

次に、顯季は能信の庶子であつたが、能信はかつて後三條・白河天皇の不遇時代をかばつた人であり、白河天皇は自分の身がかくあるのもすべて故能信のおかげだとして、必ず能信には「殿」の字をつけて敬つたというが（愚管抄）、この點からも天皇の顯季

に對する感情を推測しうるであらう。

天皇がその政策を遂行する支持層として登用したのは中下流貴族層であつたが、中でも天皇の母方の叔父である閑院實季の榮進は著しかった。顯季はこの實季の猶子であつたばかりでなく、顯季の妻（經平女、通俊妹）の姉は實季の正室であり、又、他の一人の姉妹經子は天皇の典侍で、寵を受けて承保二年覺行法親王を生んでいる（本朝皇胤紹運錄）。

しかも天皇と顯季との親密さは以上のような、言わば「私的」な面のみに依つていたのではなかつた。天皇は皇室の權威回復に努力すると共に、しきりに行幸・遊宴・造宮・造寺などの豪華な消費生活を行つたが、その經費はすべて受領層貴族によつて支えられたものであつて、天皇と受領とは實に密接不可分の關係にあつた。父母兩系及び姻戚を受領の家として持つた顯季は、このような言わば公の面においても天皇と切離され難い關係にあつたのである。

以上顯季周邊の人間關係、特に白河宮廷との關係は、彼の生涯に特異の榮華を約束づけるものであつた。

顯季は延久元年十二月左衛門尉に任ぜられ（十五歳）、四年十二月白河天皇の踐祚と共に藏人となり、五年正月左近將監、八月從五位下、六年正月左兵衛權佐、承保二年正月、舅播磨守經平坊門の賞を讓られて讃岐守に任ぜられ（二十一歳）、三年正月從五位上十一月造六條廟殿の功で正五位下、承暦二年正月從四位下、六月丹波守に遷り（二十四歳）、五年正月讃岐守の治績で從四位上、永保三年正月正四位下（二十九歳）、翌應徳元年十二月尾張守に遷つ

た。三年十一月天皇は堀河天皇に讓位して直ちに院別當・判官代を任命して院政を開始したが、初任別當には源師忠・閑院實季・同仲實・顯季及び大江匡房が任ぜられた。かくして院廳の樞機に參畫すると共に引續き受領を歷任し、寛治四年八月伊豫守、八年二月播磨守、七月修理大夫を兼ね(四十歳)、康和三年七月美作守翌年三月正四位上(四十八歳)、五年正月、堀河天皇の女御茨子(實季女)が宗仁親王を生み、六月親王宣下されると同時に親王家々司となり(本朝世紀)、八月立坊と共に春宮權亮を兼ね、長治元年正月春宮亮及び美作守をやめて修理大夫の官に留まつたが、造宮實によつて從三位となり公卿の座に就いた(五十歳)。承保二年讃岐守となつてより正に三十年、「受領三十年相續不斷」と中右記に記されている。しかも院近臣の特權として遠國の國司とはならず、専ら近國の熟國を賜わつていたのである。勿論在任中ずつと任國に下つていたのではなく、常に京にいて院の機密に與つていたのであるが、しかし全く任國に下らなかつたのではなく、「播磨に下りて侍りしに」「修理大夫顯季太宰大貳にて下らんとし侍りけるに」(六條修理大夫集)とあるが如く、時々は下向したのである。これは要するに租稅收納期になると收奪の爲に赴いた當代受領一般の所爲である。

天仁元年十一月造宮實によつて正三位となつた顯季は、翌二年正月最大の受領たる太宰大貳に任ぜられた(五十七歳)。修理大夫を兼ねたままであつたが、當時修理大夫は内藏頭などと同じく、言わば經濟關係として相當重要な役目であつたから、この二官の攝職には非難も強かつた(中右記)。ともかく顯季が累代受領の家

に生れ、又彼自信長年の受領生活に依つて得た富は巨大なものであつたに違ひない。播磨守在任中の立庄の記録が残つていと言うが(註2)、院近臣として勢威を振つていた彼のことであるからこのような例は頗る多かつたであらう。十訓抄第九に見える、東國の庄をめぐつて館の三郎義光と争つた話や、長治元年三月に人臣では道長以來始めて九體丈六の阿彌陀佛を造つたこと(中右記)などによつても、彼が巨富を擁していたことが察せられる。散木奇歌集によると顯季の邸宅や山莊は八條・六條・桂・諸院・ひつめ等々頗る多くあり、俊賴はしばしば赴いて歌を詠んでいる。そしてその邸宅も各々華麗を極めていたらしいことは、鳥丸西の顯季邸の前を通りかかつた關白師通が「受領の分際でけしからん」と怒つて破壊せしめたという話(吉部秘訓抄)によつても想像される。この話は當時の政界保守派、即ち上流貴族の多くが院に忠勤をぬきんで我物顔に權勢を振つている成り上りの近臣貴族にいかにも惡感情を抱いていたかを示すものであるが、又それほど顯季を筆頭とする院近臣の富は巨大なものであつたのである。

しかしその師通も康和元年夏京都を襲つた疫病にあつて倒れ、次いで師通の父師實が歿し、師通の後を嗣いだ忠實が保安二年白河法皇と衝突して引退し、忠通が關白となつたが全く虛位を擁するにすぎず(中右記、長秋記、愚管抄)、「政出白河」の體、全不依相門二(中右記大治四年七月十五日)という強力な院政體制が出現し、ここに顯季及びその子長實・家保を筆頭として藤原基隆・忠隆父子、同隆時、葉室顯隆、高階爲章ら院の近臣の勢威はその極點に達したのであつた。彼らの詳細については本朝世紀

(康和五年十二月二十日)・中右記(同上二十一日、天永二年正月二十四日、十月二十五日、大治四年正月十五日、同七月十五日等)及び長秋記・永昌記・今鏡・愚管抄などを参照されたい。

顯季は遂に参議にはなれなかつたが、それは一に詩文の道に暗いため院も任じにくかつただけで、院近臣の筆頭としてその實力は遙かに納言参議を壓して、實に「世の覺えにておはせし人」(今鏡すべらぎの上)であつた。

## 2 顯季の歌壇的地位

顯季の系圖上の父隆經はその詠が後拾遺集に三首、全葉集に三首、詞花集に一首見えているからかなりの歌人であつたのであらう。又母の親子も和歌に無縁な人でなかつたことは有名な「寛治五年從二位親子家草子歌合」を主催しているのによつても知られるので、顯季は若い頃から父母の影響で作歌するようになったのであらう。已に六位時代(延久五年八月以前)の詠が六條修理大夫集に見えている(「ある六位の」云々と詞書のある歌)。年代のはつきりしている最も古い顯季の歌は承暦二年四月殿上歌合の時の歌である。この大規模な歌合(今鏡・殿上日記・袋草子)の中心になつた歌人は、實政(儒家、後三條院近臣)・匡房(大江氏)・俊綱(頼通の庶子・橘氏、受領で當代屈指の富豪であつた)・公實・仲實(共に實季男)・顯綱(讃岐・伯耆・但馬等の國司を歴任した受領)・家道(顯綱男)・正家(日野家出身の儒者、越中・伊豫の國司)・定綱(四條經家の猶子)・道良(宇多源氏經長男)・季實(小野宮經季男)・公定(經家男)・伊家(受領公基男)・

師賢(宇多源氏實通男)・爲家(高階氏、受領、院近臣)・基綱(經信男)・通輔(小野宮公房男)及び通俊(後拾遺集撰者、院近臣)等の殿上人で、ただ一人家忠が關白師實の子であるのを除いて宇多源氏・閑院・四條・小野宮・日野・大江家等の攝關家の盛時には下積みであつた家の人々か、或は受領・儒者出身の中流貴族で、みんな天皇の側近であつたことは注目される。これらの人々はすべて政治的に共通した立場に立ち、常に天皇を中心として相寄り相集まつていたらしいが、その中には歌人も少からずいたので、政事の果てには天皇も好む道であるから、和歌を詠みあうことも多かつたのであらう。この歌合より三年前の承保二年九月に殿上歌合が行われているが(類聚歌合に斷簡があり、書陵部に完本がある。但し後者に依ると承保三年である)、私が公卿補任及び尊卑分脈などから作者の經歷を調べてみたところ、殆ど承暦歌合と同じ階層や家系の人々で、この歌合の作者もすべて天皇の近臣であつたと考えられ、即ち承保・承暦前後の歌壇には顯房のような權門歌人や經信のような自他共に第一人者として許されている歌人もいたが、彼らは言わば一國一城の主で、孤立的な存在であつたのに對して、上述のような政治的立場の一致した近臣歌人グループは、天皇の愛顧を受けて強く結果集していたという點からして、むしろこの方が歌壇の中心的な存在であつたのであらう(承暦歌合の時、天皇は深甚な興味をこれら近臣歌人たちの競技に寄せたらしく、朝野群載によると左右の歌人たちは味方の勝利を神に祈つて天皇の期待に應えようとしている程である)。通俊が狷介獨尊孤高の詩人經信(經信)帥大納言は弟子の爲に頗る腹くろしと

いへり。依てその流れ傳へならふ人多からざるものをや。」と胡琴教録にあるのを見てもその性格の一端が知られよう)を措いてやがで後拾遺集を撰進したのも、通俊がこの近臣歌人グループの有力な一員で、天皇に信寵されていた事に依るのであらう(註3)。顯季もこの近臣グループの一人として和歌への關心が更に深められたのであらうが、特に妻の兄通俊からの影響は強かつたことと思われる。

これ以後顯季の列した主な歌合を左に掲げておく(類とあるのは類聚歌合、群は群書類従に收められているもの。数字は顯季の年齢)。

寛治五年八月二十三日左近權中將宗通朝臣家歌合(類) 33

同年十月十三日從二位親子家草子歌合(類) 39

寛治七年五月五日郁芳門院根合(群・類・中右記) 42

永長元年三月十一日中殿御會(中殿御會部類・袋草子) 48

康和四年閏五月二日・同七日堀河院聽書合(群) 48 美作守とあるのが顯季。

あるのが顯季。

嘉承二年三月六日鳥羽殿詠和歌(中右記) 53

永久四年四月四日鳥羽殿北面歌合(類) 62

同六月五日六條宰相家歌合 判者顯季(群)

元永元年五月新中將雅定家歌合(類) 64

同年六月二十九日右兵衛督實行卿家歌合 判者顯季(群・類)

元永二年七月十五日院北面歌合(長秋記) 65

同年七月十三日内大臣家歌合 判者顯季(群・類)

保安二年閏五月十三日内藏頭長實白河家歌合 判者顯季(類)

67

同月二十六日内藏頭長實朝臣家歌合 判者顯季(類)

この間康和年中に所謂堀河院太郎百首を奉り、又しばしば自家で歌合を催し(六條修理大夫集・散木寄集・金葉集等)、元永元年六月には六條東洞院邸において有名な人麿影供を行つてゐる。

顯季の和歌は當時の一般的傾向である知巧的・觀念的な風で、とりたてて言うほどのこともないが、中には平明な調べの中に新鮮な自然の題材をとらえたものもみえ、又、俊賴・匡房・隆源(顯季の甥)ら萬葉集に關心を拂つた人々の影響を受けてか、かなり萬葉の古語などをとり入れた和歌を詠じているなどの點が特徴と言えようか。例えば

霧はれぬをの萩原咲きにけり行きかふ人の袖白ふまで(六條修理大夫集)

松がねに衣かたしき夜もすがらながむる月を妹見つらむか(金葉集秋)

前者は萬葉集五七番の歌、後者は六六・一二三番の歌などから影響を受けたものであらう。

顯季の歌論は歌合の判詞によると「なだらかな調べを重んじ不合理な見立てを排してやや知巧的な態度が見え、俊賴の新風と基俊の保守的な態度とを兩者ながら認めてかなり妥協的・常識的な穩健なものであつた(尙、顯季の和歌については二、三の研究もあることであるから詳しくは述べない。註4)。

かくの如く顯季は、その歌風にも歌論にもとりたてて稱揚するほど獨創的なものも見えず、一世に傑出した歌人とも歌學者とも

評し難いのであるが、その生涯を經信・匡房・通俊・永祿・國基・行尊・周防内侍・藤顯仲・行宗・祐子内親王家紀伊・俊忠・公實・基俊・爲忠・雅定・俊頼ら當代一流の歌人と交際し（六條修理大夫集等參照）、又和歌を好んだ白河院に近侍し、相應に歌道に精進したので、おのずから作家の手法を體得し、和歌に對する鑑識眼が養われ、萬葉集等の古歌に關する知識を貯えるに至つたやうである。

顯季は前に述べたように「院の近臣」として絶大な權勢と富裕な經濟力とを持っていたので、彼にすがつて官途を得ようとしたり、經濟的に庇護を受けようとする人々は多かつたらしい。俊頼は伊勢下向にあつて顯季に娘の衣服を乞ひ（六條修理大夫集）、顯季を通じて神祇伯を得ようとし（散木奇歌集雜）、津守國基も顯季を介して白河院に何事かを願ひ出ているが（詞花集雜下・六條修理大夫集）、一方顯季も歌人達をその山莊や邸に招いて歌合を催し、人麿影供を行つたりしている。これらのことは言わば顯季が歌壇の世話人的存在たることを示しているものであるが、しかしながらそれは決して單なる幹事役とか幹旋者とかいふような地位に止まつてゐるものではなかつた。顯季は絶大な權勢と富とを持ちながら、その性格は例えば人麿影供の時に俊頼を初獻者に推しているように、決して狷介慢心な人ではなかつたし、又かなり歌道に精進した人でもあつたから、熱心に歌人間の肝煎をするうちに歌壇内部に大きな勢望を持つやうになるのはおのずからなる成行であらう。

袋草子撰集故實の條に「時大臣又一人歌、雖レ非秀逸、必可レ入レ

之、英雄公達又隨宜可レ優事也」とあるように、古代においては至尊や權門の人々の歌壇的地位はその力量を越えて絶對であつたが、これは歌壇そのものが官僚貴族を中心として構成されている以上當然のことと言えよう。所で院政期における「院近臣」と言ふのは言わば新しい權力者、權門であつた。彼らは古い權門——攝關家——に比して官位は低く、又受領を卑しとする前代の見解が根強く支配している時代であつたから、人々は氣易くその門に出入したかもしれないが、やはりその權勢を憚つて恭謙の態をよそおい或は追從の念を持つて對したに違ひない。顯季が晩年の歌合では常に判者に推され、俊頼でさえ唯々としてその判を受け（六條宰相家歌合・長實朝臣家歌合・長實白河家歌合）、遂には再奏本金葉集において顯季の歌を卷頭に推していることなどは、こゝういつた社會的地位に基づいた顯季の歌壇的地位の高さを如實に示すものであらう。

新舊兩派が對立し、多くの歌人達がその間に介在し、動搖している當時の歌壇において、顯季が單に無名の歌人に止まるには社會的地位が高すぎ、その點で群小歌人とは區別せらるべき存在であつたが、俊頼と甚だ親しかつたに拘らず單に新風を理解し、容認するに止まつて、決定的に支持するに至らなかつたのは、究極的にはその性格乃至は歌人の資質に歸せしめられるものかもしれないが、同時に顯季のこの社會的地位に基づく歌壇の地位、即ち歌壇の長老であり、まとめ役であるという心理が、兩派の立場を共に理解し、包容するといふやうな妥協的態度となつて現われたのであらう。そしてこの顯季の幅の廣い、寛容な態度が顯輔以下

の子孫に伝えられて行くのである。

### 3 顯季より顯輔へ

顯季はその室（經平女）との間に長實・家保・顯輔という三人の名のある男子を持つていたが、そのうち家保は詠が勅撰集には見えず、歌人ではなかつたらしいが、長實は十九歳の時の詠が後拾遺集春下に見え、かなりの歌人であつた。しかし顯季が秀でた歌人として將來を期待したのは顯輔で、例の人麿の影を「一男中納言長實卿、二男參議家保卿この道に堪へずとて三男左京大夫顯輔卿に譲」つたのであつた（古今著聞集）。そして顯季はその生涯の間に身につけた和歌に關するものもの知識や見解、例えば萬葉集をはじめとする古歌の注釋、或は作歌の態度・作法等を顯輔に講じたらしい。

故六條左京大夫申されしは、先親修理大夫 顯季卿 予に萬葉集を講じ給ひし時云、萬葉集はただ和歌の髓にて納、箱中で可レ持、常に披みて不レ可レ好讀、和歌損ずるものなりと云々、（顯昭、六百番陳狀）

とあるのは萬葉集を顯輔に講義した事實を示すものであると同時に作歌の態度を教えたものであり、又、

左京大夫顯輔、新院に参りたりけるに「百首よむやうは習ひたるか」と仰せごとありければ「習ひたること候はず、顯季も教へ候はず」と申（下略）（古今著聞集）

とあるのは、顯季が顯輔に和歌の故實・作法を教えたことを世の人々が知つていたことを示しているものである。又、顯昭の「拾

遺抄註」に「世にふれば又もこえけり鈴鹿山昔の今に成るにやあるらん」の歌に關して顯季は顯輔に秀句を詠む心得を示し、「秀句はこの歌の樣によむべし」と言つた話が見えているが、これは作歌の心得を示すと同時に古歌の鑑賞態度を教えたものであり、又顯昭の「袖中抄」十に、能宣の「行末の命も知らぬ別路はけふあふ坂や限りなるらむ」の歌の注釋を顯季が行つた由が見えており、更に顯昭の「古今集注」十五・十七等によると顯季はしばしば和歌にまつわる話を顯輔にしたらしいが、これらが口傳として子孫に伝えられ袋草子などの材料になつたのもあろう。その詳細はもとより明らかにすべくもないが、しかし以上の斷片的な記録によつても顯季がその生涯得た和歌に關する知識や見解（それは組織的なものではなかつたかもしれなが）を、人麿の影と共に子孫に伝えようとした考えを確かに持つていたことが分るのである。所謂六條歌學家なるものの起源的な形をここに見ることができる。

顯季の子長實・家保は顯季が保安四年歿した後も院の寵愛を受けて近臣として時めき、その子孫は四條・山科等の家をたてて長く續いた。顯輔は大治二年讒言にあつて一時失脚したが（公卿補任・永昌記大治四年七月十五日・顯輔卿集・袋草子等）やがて姪の忠通（崇徳中宮聖子（皇嘉門院）を生んでゐた關係などもあつて關白忠通や崇徳天皇の庇護によつて政界に送り咲いた。しかし二人の兄の任ぜられた納言・參議には至らず三位左京大夫を先途として、政治家であるよりもむしろ歌人としてその存在を明ら

かにした人であつた。顯輔はその支持者であつた俊頼の歿後、俊頼の對立者基俊には學識も作歌の力量も到底及ばなかつたので、むしろ基俊に追隨するような態度をさへ示したが（顯輔卿集）、その基俊も歿した後は宮廷及び關白家等權門の庇護、同族の繁榮を背景として、又已に前代一流の歌人と目されていた顯季の「歌學」の繼承者としての權威を持ち、時代の趨勢であつた新風に無理解を示したから多くの歌人の支持もあり、ここに歌壇の中心人物たりえて基俊の歿後わずか一年半を経た天養元年六月詞花集を撰進していた甥家成家の歌合に判者として迎えられ、六年久安百首を率り、仁平年中詞花集を撰進して久壽二年歌壇の覇者たるまま長逝したのであつた。

顯輔は尊卑分脈によると顯賢・清輔・重家・顯昭・季經・長覺ら十二人の子女を持つていた。顯輔の歌學書は現在傳つていないが、その「歌學」をこれらの子供達に講じたことは清輔や顯昭の諸著によつてうかがうことが出来る。

故左京常に被<sub>レ</sub>誠云、古歌として無下に下劣事は不可<sub>レ</sub>詠、先年白河院にて有<sub>二</sub>和歌、師時卿くましねと云事を讀む、院被<sub>レ</sub>仰云、無下にうたてあり、汝程のもの如<sub>レ</sub>此事知様やはある、歌には古もよめりとて如<sub>レ</sub>此事は不可<sub>レ</sub>讀事也云々、（清輔、袋草子）

とあるが、これは歌話を通じて作歌の心得を示したものである。更に顯昭の諸著には顯輔の古歌の解釋、鑑賞、批評の類が多く引

用されている。その例を少しく擧げるならば、顯輔は、業平の「今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」の歌について、まず「返歌」の意義を述べた後この歌を批評し（古今集註一）、「白雲にはねうち交しとぶ雁のかげさへ見ゆる秋の夜の月」の歌について、この歌が「山戸菟田集」に入つてゐること、それによつてこの歌の解説・批評を試み（同四）、「たむけにはつづりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ」の歌を評し（同九）、「右近の馬場のひをりの日」の釋義を行い（同十一、袖中抄一）、「しほみてば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き」の解釋を爲し（袖中抄四）、「みちのくのあさかの沼の花かつみ」に關連して「かつみ」の意を述べ（同十四、古今集註十四）、「たのむのかり」云々の意を講じ（袖中抄十一）、「信濃なるはやの芒も風吹けばそよそよさこそ言はまほしけれ」の解釋を行つた（同十九）由が見えてゐる。そして顯輔のこのような古歌の評釋研究は、やがて古歌と關連のある古典、例えば伊勢物語などへの注釋・研究へと進んで行つたようである（袖中抄三「梓弓ま弓つき弓」の解、古今集註十三「狩の使」の説など）。そして顯輔も古歌を評釋するにあたつて、しばしば聞き傳えた歌話・逸話などを子供達に語つたらしい（古今集註十五、袖中抄十二、拾遺抄註、秋、詞花集註、春など）。

更に注目すべきは顯輔が古歌や古典を評釋し、研究するにあつて、顯季から受け傳えたものや自己の見解のみに執することなく、廣く當代の識者達に不審を問いただしたという態度である。それは例えば「顯輔卿云、くきらとは何鳥ぞと俊頼に問ひしか



(顯輔)

ば」(顯昭、散木集註)、「故左京兆の申されしは、この『ま弓つき弓』の歌はいかによめるにか、あまたの人に尋ねれども確かに言ひひらく人なし」(顯昭、袖中抄三)、或は「きみ住まばとはましものを津の國の生田の森の秋の初風(中略)此歌はいかによみたるぞと顯輔卿の間ひ侍しに忠兼申云、(下略)」「(詞花集註)などとなるのによつてもうかがわれる。

顯輔は詞花集撰進の態度を見ても、或は久安五年六月の家成家歌合の判詞を見ても、新舊兩派を共に認めて、甚だ妥協的・認容的な立場に立ち、又彼自身の歌風も穩健なものであつたが、古歌や古典の評注にあたつても、人々の意見を廣く求め、とりまといふという態度をとつてゐる。これは父顯季の態度とはほ共通してゐるのであつて、顯輔自身の性格や或は和歌に對して徹底した立場がなかつたことに由來するのであるが、一方當時いまだに新舊兩派が對立し、多くの歌人らが動搖してゐる情勢下においては兩派の上に立つて歌壇の覇者としての地位を守る爲に、或はやむをえぬものであつたのかもしれない。しかしながら顯輔の和歌研究の内容は、かつて顯季が顯輔に講じた「歌學」のような言わば耳學問的な、一通りの、常識的なものとは違つて、廣い視野に立つた、解釋學的な、突込んだものが多く、顯季のそれに比べて次第に組織化されて來てゐるように見える。かくして顯季に始まる六條歌學は、顯輔が第一級の政治家ではなくして、むしろその官僚貴族としての地位を歌人たるの名譽において支えた人であつたから、ここできつかりと基礎づけられたのであつた。

#### 4 顯輔より清輔・顯昭へ

顯輔は「子孫の中にこの道に堪へたり」と言つて人麿の影・破子の硯を清輔に譲つた(古今著聞集)。顯昭の諸著に見える顯輔の古歌研究には未だ多くの鑑賞的な面があるが、清輔の研究態度は博引傍證、甚だ論證的、組織的である。これは清輔に顯輔ほどの歌人的な素質がなく、却つて學者的資質に恵まれていたからであるが、しかし清輔も資料を蒐集し、古今の歌説を集め探るといふ幅の廣い研究態度においては顯季・顯輔以來のそれを受けついでゐる。(註5)更に清輔の多くの歌學書が二條院はじめ權門の人々に獻上する目的で書かれた爲、穩健寛容な父祖の歌學精神の上に啓蒙學派的な性格を多分に加えてゐる。

顯輔も已に萬葉集の校本を作つたが(詞林采集抄)、清輔は古今集や後撰集の校本を作り(定家「三代集々間事」、重家は六條家本萬葉を書寫する(仙覺、文永本奥書)など、六條家代々が行つた古典の本文設定という重要な仕事も、以上のような六條歌學の精神と密接な關係を持つていたのであることは言うまでもない。

清輔は幸か不幸か作家としての天分には乏しく、その歌風も顯輔の持つていた情趣的な傾向を失ひ、六條家の歌風は一般にこれに倣つて次第に知巧的となり古めかしくなつて行つた。當時その風に嫌はず獨自な歌を詠みあつてゐた歌林苑のグループがあり、特に晩年の清輔は御子左俊成の力量に壓せられがちではあつたがともかくも「歌のかたの宏才はならぶ人なし」(無名抄)と人々に稱せられ、右大臣兼實の信任を得て(玉葉)辛うじて歌壇の第

一人者としての地位を守り續けたのであつた。

尙、顯輔の長子顯方（尊卑分脈の顯方か）も古歌の造詣が深かつたらしいが（詞花集註）、清輔の歿後六條歌學を更に發展せしめたのは顯輔の嫡子顯昭である。顯昭は清輔以上に廣く古今の説を涉獵して、主として古歌の注釋・考證を行い、時には清輔の説をも正否を検討してその歌學を大成せしめた人である。六條歌學は顯季に、芽生え顯輔が基礎づけ、清輔に至つて確立し、顯昭がこれをより深化せしめたと言ひうるであらうが、清輔・顯昭については已に多くの研究もあることであるから（註6）今は一抹に止めておく。

## 5 中世における六條家

中世における六條家については紙數の制限もあるので、以下管見にふれた資料を中心に略説したい。

建久・正治の間における御子左・六條家の血みどろな抗争過程については已に（註6）に掲げたような諸論放があるので略すがとにかく清輔・重家亡きのち官位の高さから言つても六條家の中心人物となつたのは季經（顯輔の末子）・經家（重家男）であつた。この季經と經家は當時の政界の實力者土御門通親の家人であつたので（明月記正治二年七月十八日）、正治百首の沙汰をめぐつて、賄賂好みの通親（明月記正治元年正月二十日・二十二日、十二月三日等）に賄賂を贈つて反對派の定家を百首の人数から除外し（と定家は推量した。明月記正治二年七月十八日）、これに對して俊成が遂に後鳥羽上皇に直訴という手段を強行して所謂「正治

二年和字奏狀」を率ひ、これによつて定家の和歌はじめて上皇の目に觸れたが、その歌風は豪奢華美を好み、潤達な二十一歳の青年上皇を感激せしめ（同八月二十八日等）、遂に上皇をして強力な御子左家支持者となさしめたのであつた。

一般に白河・鳥羽・後白河の三代一世紀を院政期として論ずるが、實は後鳥羽院政をまで含めるのが妥當であるという最近の歴史學説は傾聴に値しよう（註7）。後鳥羽院政は、後白河院政が平氏及び頼朝政權に對抗して舊勢力を結集し、王朝政權を擁護しようとしたあとを承けて鎌倉政權に對抗し、遂に承久の亂に至つて破滅するのであるが、後鳥羽上皇は（建仁二年通親の死後）自ら院應において政權を執り、一方歴代法皇のあとに倣つて豪華な消費生活を行い、それに伴つて仙洞内外の綱紀風俗は頹廢し、無用の刺員は官衛に溢れ、院政期特有の様相が展開されるのであるが要するに後鳥羽院政は後白河院政と共に後期院政として把握すべきであらう。但し正治の頃は未だ通親の生存中で、上皇の親政は實質的には開始されていなかったが、しかし事と歌に關してはこの正治百首を契機として上皇は自己の權威の大きさを自覺して裁斷し、御子左家を支持したのであつて、ここに長年の御子左・六條家の抗争も院權力の發動の下に決定的な御子左家の勝利が確定したのであつた。而して通親さえもこの後は上皇の意に従つて御子左家を支持せざるを得なくなり（明月記正治二年十月十二日、十一月八日、十二月二十六日等）ここに六條家の蠢動は完全に封殺されるに至る。この事は古代中世においてはいかにすぐれた歌風を持つ歌人グループであつても、政治權力の背景がなくては結

局歌壇の覇者となることが出来ないのだ、ということを端的に物語っているものでもある。

白河院政を支持した近臣層の筆頭顯季によつて創始された六條藤家は、皮肉にも後鳥羽院政の壓力の下にあつてなく實質的崩壊を遂げるに至り、翌建仁元年十一月に開かれた和歌所の寄人には重家の子有家の外には六條家側からは一人も加えられず、後鳥羽院政はまづしぐらに新古今集撰進へと歌壇を驅りたてて行つた。

有家のみは和歌所寄人にも撰者にも加えられたが、これは元來有家が御子左家と親しく、歌風も御子左派に近かつたからであらうと言う。(註8) 尙、定家と親しかつたことは明月記正治二年八月四日、建仁二年七月二十四日、八月二十日、承元二年十二月十一日の條などを見ても分る。しかも大して影響力のある撰者ではなかつたらしく「無爲之撰者」(延慶兩卿訴陳狀)等と評されている。

千五百番歌合に判者となつたのを最後に歌壇の第一線を退いた顯昭は、承元元年五月「日本紀歌注」を著して法橋に叙せられたが(明月記)これ以後消息を絶ち、經家は承元二年九月に、その弟顯家は建保三年八月に出家し、季經は建仁元年出家し、承久三年十月九十餘歳で薨じたが(公卿補任)、已に歌人としての生命は千五百番歌合で判者となつたのを限りとして失われていた。經家の子家衡、季經の子保季(尊卑分脈に依る。公卿補任に依ると重家の子)はその後も作歌を續け、歌合などにもつらなつてゐるが大きな影響力はなかつた。そして六條家はこれらの老いた世代に

代つて、已に元久の頃定家の門に入つた顯家の子知家(源承和歌口傳。明月記に知家の名が初めて出てくるのは承元元年八月十一日。尙井蛙抄參照)が建保元年の頃から院歌合に參仕し始めるのである(明月記九月十三日)。

知家は定家に目をかけられ、已に新古今集に一首、又、新勅撰集には十二首撰入され、爲家とは兄弟のように親しく交わつてゐたが(源承和歌口傳)、曆仁元年出家して蓮性と號し、次いで定家の歿後、辨入道眞觀と心を合せて寛元四年頃から爲家に叛旗を翻した(同上)。寛元四年十二月春日若宮歌合はその旗上げの歌合である。この年は後嵯峨天皇が後深草天皇に讓位して院政を開始した年であるが、眞觀の弟定嗣(葉黃記の筆者)は後嵯峨院の寵臣であり(葉黃記・岡屋關白記・古今著聞集など)、葉室一族の顯朝も院の近臣で、眞觀らのグループには好意を寄せていたらしく(岡屋關白記、源承和歌口傳)これらを通じて眞觀・蓮性は上皇の暗黙の支持を受けたらしく、次いで内大臣家良、同基家らの和歌好きの權門にとり入つて、寶治・建長頃の歌壇においてかなり大きな勢力となつてゐたことは建長八年九月十三夜歌合(書陵部藏「百首歌合」)などに依つて明らかである。蓮性は萬葉集を尊重する父祖の家學を受けついでか、しきりに萬葉の歌を本歌とする和歌や、萬葉語を取入れた和歌などを作つたが、御子左家の側ではこれを異體として排斥し、特に爲家の姻戚でもあり、言わば御子左家のバトロンでもあつた西園寺實氏は、しばしば烈しく蓮性を攻撃し(建長三年九月十三夜影供歌合・源承和歌口傳・井蛙抄など)、蓮性も實氏の權勢に屈せず、果敢に反撃して、その對立

はかなり激烈な形をとつたようである（延慶兩卿訴陳狀。尙、眞觀・蓮性による反爲家の運動についての詳細は、近く機會を得て發表したいと思つてゐる）。更に蓮性は寶治二年九月院歌合における爲家の判に不満を持つて有名な「蓮性陳狀」を後醍醐上皇に奉るほどであつたが、正嘉二年十一月七十五歳で歿した（源承和歌口傳）。

蓮性の弟顯氏も歌人で、寛喜四年三月二十五日の石清水若宮歌合以下の歌合にしばしば出席しているが、後に所謂關東祇候の延臣として幕府に仕え、仁治元年正月十九日以降の吾妻鏡に頻りにその名を見せ、又上洛しては時々歌合に出席している。「從二位顯氏集」（書陵部藏）に依ると常に武士たちの歌合にも出席していた。その子三位重氏も勅撰の歌人である。關東祇候の延臣はよく新しい門地を獲得して家を起しているが、顯氏の子孫は紙屋河を名乗つて暫くの間存続した（これに對して知家の子孫は九條を稱した）。

蓮性の死後、反御子左派の首領眞觀は、文應元年五月・十二月に關東に下り（吾妻鏡）やがて將軍宗尊の歌道師範となり、關東の勢力を背景にして弘長二年九月續古今集撰者の一人に加えられる（源承和歌口傳）、同時に反御子左派の家長・基家及び知家の子行家も撰者となつた。恐らく眞觀の推舉に依つたものであらう。前から撰者であつた爲家は怒つて撰集にあまり關與しなくなり、眞觀が専ら業を行つたらしい（源承和歌口傳、井蛙抄、吾妻鏡文永二年十月十八日の條）。眞觀の勢力はこのように大きなものに成り上り、それにつれて提携者の六條家の歌壇的地位もかなり上昇し

たと思われるが、しかし行家その人は温厚な性格であつたようである（源承和歌口傳）。行家はこれらの人々と共に文永二年續古今集を撰進したが、翌三年宗尊の廢位と共に眞觀も失脚し（源承和歌口傳）、行家も歌壇の第一線を退き、文永十二年正月從二位を極位として薨じた。御子左家は再び歌壇を獨占制覇し、六條家は急速に衰えるが、しかし重代歌道の家として飛鳥井家と共に歌壇の一隅に座を占めていたようである。

行家の後はその子隆博が嗣いたが、父には劣るにしても相應の力量ある歌人としての名聲はあり（井蛙抄）從二位大藏卿にまで昇進した。永仁元年八月二十七日伏見天皇の召によつて參内し、二條爲世・京極爲兼・飛鳥井雅有と共に新しい勅撰集の撰者たべく指示され、感激のあまり落涙して天皇からその歌道執心を嘉賞された。その席で御子左嫡流の爲世と對立した爲兼の意見に隆博は一々賛成したが（伏見天皇宸記）、やはり父祖傳來の反御子左の氣骨は強かつたものと見える。しかし撰集に先立つて爲兼は佐渡に配流され、永仁六年十二月隆博も薨じたので遂に撰集は中止のやむなきに至り、隆博も勅撰業者の榮を擔うことは出来なかつた。

隆博の後はその子隆教が家を繼ぎ、正二位に至り、長命して南北朝の貞和四年十月まで生存した。隆教は若い頃非器であつたが住吉・玉津島神社に祈つて歌道上手となつた由が井蛙抄に見えている。鎌倉時代においては家業を繼ぎえぬこと、即ち隆教の場合歌人たざること、そのまま家の没落斷絶を意味していたのであるからこそ眞剣に歌人たるべく努力したのであらう。隆教の後

はその子隆朝（尊卑分脈に依る。公卿補任によると隆博男）が繼ぎ、隆朝が文和四年十二月に薨じた後はその子行輔が家業を承けた。延文元年六月、新千載集撰進のため諸歌人より百首を召した時、行輔は未練卑官のため人数には加えられなかつたが（國太曆同年八月三日）、やがて追加の人数に入つたようである（延文百首）。行輔は父祖代々叙せられた三位にもならず（勅撰作者部類に依ると四位で終つたらしい）、その詠も勅撰集に五百首しか見えず、非才であつたのか、或は早世したのか分らぬが、これを最後として歌道家としての六條家（知家流の九條家）は遂に斷絶するに至る。顯季以來三百年に足りない期間であつた。

（五六・一〇・九）

註1 院政史の研究は最近活發である。主な論攷には林屋辰三郎氏「古代國家の解體」、石母田正氏「古代末期の政治過程および政治形態」（『社會構成史體系』所收）、竹内理三氏「院廳政權の本質」（『古代社會』所收）、有本實氏「院政史研究の動向」（『日本歴史八七號）、橋本義彦氏「院政々權の一考察」（『書陵部紀要四號）、現在でも價值のあるものとして和田英松「國史國文之研究」中の諸論文等があり、拙稿もこれらに負う所が多かつた。

註2 註1に掲げた有本氏の論文参照。

註3 通俊が近臣である證據は種々存する。彼の父經平、兄通

宗が受領であり、通俊も亦遙任の國司を歷任し、しばしば天皇の行幸・造寺・造宮の行事を擔當し、又有職家として文章家として匡房と並んで宮廷の機密に參與し、後に院別當に任ぜられていること（公卿補任・中右記・諸寺塔供養記・水左記・帥記・今鏡等）によつてその宮廷における地位は明かである。尙近臣としての通俊と後拾遺集撰進の事情については別の機會に論じたいと思つてゐる。

註4 例えば能勢朝次「六條家の歌人とその歌學思想」（國語國文の研究昭和三年三月、十月號）、實方清氏「日本文藝理論」、西下經一氏執筆の日本文學大辭典「顯季」の項など。

註5 例えば清輔は父祖の説のみでなく、通宗・通俊以下の學統をも受け容れている事が明らかにされている。西下經一氏「古今集の傳本の研究」、大津有一氏「註釋の成立」（國語と國文學昭和二十九年十月號）等参照。

註6 谷山茂氏「歌合をめぐる六條家と御子左家」（『幽玄の研究』所收）、佐々木信綱氏「日本歌學史」、福井久藏「大日本歌學史」、久曾神昇氏「顯昭・寂蓮」、風卷景次郎氏「新古今時代」、島津忠夫氏「俊恵法師をめづつて」（『國語國文昭和二十八年十二月號』）等。

註7 註1に掲げた林屋辰三郎氏の論文。

註8 小島吉雄氏「新古今和歌集の研究」續篇。